

## 詩時評

### 第18回

# 暮らしから 世界に広がること

松本 衆司

新型コロナウイルス感染症によるパンデミックは世界を震撼させ、その脅威は今もなお続いている。私たちには改めて思い直すべきことがある。その中での時評となる。「暮らしから世界に広がるものを書きたいと思っています。そして、私たちがどこから来て、どこへ行くのか。迫りたいと思っていますが、まだまだ、時間・空間を手繰り寄せる力がありません。詩作は難しい、でもとても楽しいです。」**「畑章夫詩集『猫的平和』**（草原詩社）のあとがきの言葉である。誰しもの詩作の原点の言葉としたい。「置き去り」を引く。

吸い殻や竹串が／足元に散らばるガード下の酒場／頭の上を／満員電車が通過する／少し離れたところの戦災慰霊碑／隅で半

開きのビニール傘が／寄りかかる／急な雨に広げられた／一本五百円は／雨がやめば置き去りで／骨の何本かは折れ曲がり／いつのまにか 消える／ビールの泡が揺れる／暗いところで／骨が光る

わがままを殺して直向きに生きる、真実を求めて直向きに詩を書く。そこに、醸し出される人生のほんものの味わいがある。この詩人には、詩人としての矜持がある。

**金堀則夫詩集『ひの石まつり』**（思潮社）

を読む。生きる風土の古層へ誘われる詩人の感性は新たな結実を齎した。「土壌」を引く。

土が／草木の根をたべて／わたしのからだのかたちで／眠っている／少し涙ぐんだのか／土の湿り具合が／からだとなっておきあがり／掘り出していくと／土のミイラがあらわれる／わたしではなく／わたしのからだにある／はかりしれない／永遠の砂／乾ききった粒子／いのちの種が／限りなくころがっている／水をやれば／こやしをやれば／ひかりをあたえれば／どこからか／ミイラは蘇ってくる／口から鼻から尻からの腐敗はすべて燃焼され／瞑想している／女のからだから五穀が生まれた／そこまで掘って始まる／その手は そこでとまっ

しまう／掘っても そこまで／限らないもの／掘り起こせない土の底／掘りだす盛り土は／土の高さへとむかって／天と地が／じっとしている／いつの間にか おのれの／からだに似合った／土饅頭をつくっている

湿った土の匂いがする。まるで漱石の「夢十夜」のような、その不思議な幻想的な光景にいのちを産み出す土の匂いがする。

**神田さよ詩集『海のほつれ』**（思潮社）を

読む。正しく洞察し、そして幻想する詩人の生きる姿勢を感じた。「震える声帯」を引く。

わたしは孕んだ 生理のうえのことなので 望んだものではなかった 群衆が去ったあと そこに佇む影のない男といつときを交わした わたしからだは意志とは関わりなく膨張してゆく ずっと以前から種は産み落とされていて からだの外に密封されていた 刃物は鋭く封を切った 小さな種は根を生やし暗い地中をざわつかせはじめた 水を得ないまま 乾燥の地へ進む 共生とうそぶく咽喉に木枯し 犠牲の子ども ははり叫んで薄い皮膜を蹴ってくる 山の麓に肩よせる村人の 憎しみとさりげない挨拶が門扉を開けたり閉めたりしている

寒い ことしはどうしてこうも寒い 殺  
生された鳥の羽のコートに身をつつんで  
膨れたからだは悲しみがいっぱい にみえ  
るがじつはぶよぶよとしていて 震える声  
帯を 眠りのなかで聞いている

着想にぐいぐいと引き摺られて読み進めた。  
生きとし生けるものの産霊から喪失への営み  
を幻想する詩人の筆力に魅せられながら。

安水稔和詩集『繋ぐ 続地名抄』を読む。  
著者二六冊目の詩集から「池田上町」を引く。

エゴノキの新芽が芽ぶくころ。／裏の小学  
校のピカピカの一年生が／新しいランドセ  
ルを背負って駆けて行く。／エゴノキの  
白い花の咲くころ。／しゃがんで地面に絵  
をかいたり線を引いたり／門のベルを押し  
てワツと声をあげて逃げたり。／エゴ  
ノキの白い花の散るころ。／散り敷く白い  
花を拾い集めて／溝を流れる水に浮かべて  
遊んだり。／（学校に遅れるよ）／エゴ  
ノキの黒い実が実るころ。／風に揺れて  
次々と音もなく落ち／音もなく坂道を転が  
り。

あとがきに、地名を題材とした詩は六〇〇  
篇を超えたとあり、体調を崩されておられる

中での詩集作成とある。安水の詩業を想うう  
ちに、彼の住まう町の名の詩に至りついた。  
慈愛の詩である。ご快癒を願いつつ、かつて  
震災後の神戸で詩の朗読会をこ一緒にさせてい  
ただいたことを感謝の心で懐かしんでいる。

愛敬浩一詩集が二冊、土曜美術社版の新・  
日本現代詩文庫一四九と砂子屋書房版の現代  
詩人文庫十七を読む。このように一人の詩人  
の詩の足跡を辿れることは幸いなことである。  
詩集『長征』より「編む」を引く。

こだわりがほどけて行く／ここが勝負のし  
どころだ／しなやかに髪振りみだし／くず  
れそうできて 九回まで／散歩をするよ  
うにして長征するのだ／旗印をハンケチに  
して／あたりまえの街を／真昼に／ほどけ  
て行くのにまかせて／編んでいくのだ／背  
水の／陣

一九八五年に紫陽社から出たこの詩集を持  
っている。愛敬の詩に向かう心を感じながら  
読み直した。若い気負いと言えはそれまでだ  
が、それが詩人という存在の心なのだ。敢え  
て言うが、それは誠実にぎりぎりの状況に向  
かい合うことなのだ。

彼末れい子『旅にしあれば』（つれあい五

〇年記念展刊）を読む。モンゴル、中国、ベ  
トナム、ラオス、ネパール、ミャンマーなど  
東アジアを中心に廻った、詩人の好奇心がこ  
ぼれ出るような旅のエッセイ群である。「癒  
しの地 ポカラの蜜蜂」を引く。

カトマンズから二百キロ西へ飛ぶ。小型  
飛行機が上昇するとすぐ窓に白いヒマラヤ  
連峰が見えた。飛行場に降り立つと圧倒的  
な山容がせまり、自然に涙があふれて来て  
止まらなかつた。ポカラの町では、ふと目  
をあげると、どこにいても芝居の書き割り  
のような八千m級の白い山々がそそり立っ  
ているのが見えるのだった。神戸の街中に  
いるのと北の方角にいつも緑の六甲山が見え  
るのと同じのだが、ポカラでは数倍の高  
さと距離を持つ。経験したことのない距離  
空間の中で、偉大な白いものにずっと見守  
られているような気配がしてならなかつた。  
ポカラの町がヒーリングスポットとして有  
名なのも、むべなるかなと思つた。／女主  
人のちか子さんが丹精を込めた広いガデー  
ンホテルの庭では、朝は柔らかな声の小鳥  
たちが鳴き交わし、夜はみごとな星空があ  
らわれた。わたしは幸運にもネパール蜂蜜  
の分蜂と遭遇した。木の下に設置されてい  
る巣箱の底面に、ドッジボール状に固まっ  
てぶら下がっていた。娘女王蜂に巣を譲っ

た母親女王蜂が、働き蜂に守られて新居に移っていく最中なのである。日本蜜蜂とよく似た小型の東洋ミツバチだ。(略)少し酸味があったが、紅茶に入れるとレモンティー風味で本当においしい。冬にはなめらかなクリーム状の結晶となり、まさに東洋ミツバチ蜜の典型的な特徴を示した。

原圭治エッセイ集『詩の希望、詩の旅』(竹林館)を読む。原圭治の詩歴は長く、「振り返ってみると、この人生で一番続けてきたことは詩を書くことだった」と「あとがき」で述懐する。その誠実に詩と向き合った七十年の折々の感想や彼が見とけた大阪の詩の風景が一冊に込められている。「金時鐘」と『長いものを書く会』前後」の一部を引く。

金時鐘は、小野十三郎という詩人と終生、詩の先達として付き合うようになる。詩集『地平線』の小野十三郎の序文は、小野の金時鐘にたいする温かな文章から始まっている。「金時鐘君は、私の大阪の友人の中では一番若い。そして家内や子供たちからも最も親しまれているわが家の賓客である。仕事をしているさいちゆうでも、彼がやってくるのと、とりつきに出た子供は、私の気持ちをよくしついでいて、『お父さん、金さんや、上つてもらおな、金さんどうぞ』と

心得たものだ。私は、私の子供たちにとつてはじめて接した異邦の詩人が、金君のようなはくとつで、且つむしろ人に人なつこい若者であつたことを、たいへんうれしく思う。私たちのあいだに、こうして生まれた人間的な親愛感とは、必ず、子供たちの将来の生き方にい、影響をあたえるにちがいないからである」。

一九五〇年代の象徴的な風景がここにある。そこには「希望」の灯りがともっている。

「海鳴り」三十二号(編集工房ノア)を読む。B6版の瀟洒な文芸誌の隅々まで、編集者であり社主である瀬沢純平の目と心が行き届いている。寄稿する人々の文章もいいのだが、広告がいい。左頁に横十九ミリ二段抜きの本の広告である。例えば、鶴見俊輔「象の消えた動物園」はこうだ。「私の目標は、平和をめぐり、もうろくするということです。もっとひろく、しなやかに、多元に開く、このキャッチコピーに頷く。

貞久秀紀「胸に手をあてて」を引く。

「胸に手をあててかんがえてごらん」といわれたことはあっても、じつさいに手をあててみたことはこのごろまでなかった。ふうなら胸に手をあてるまでもないこと――

――道はたの草花や電車からみえた道、通りすがりのあいさつなど、右手を胸に、左手をみぞおちあたりに並べて目をつむり、想いかえしているところからどこかへ離れてきていような気持ちになる。手をあてがわれたところにいるじぶんや想いかえされているものは遠くにあつて、そこからはるばる会いにきてくれるとでもいうように。とくになにも想いかえさず、ただ胸に手をあてているときも、離れたところでも、さうして感じる感じがする。

確かなものは何もなく、ただ生かされてきたことの命の日々の「今」にいる。その生理に近い「想い」を詩人はさりげない言葉によって掬い上げる。

後藤光治個人詩誌『アピラ』を読む。記念すべき創刊号である。その「創刊にあたって」の言葉を引く。

今、まさに立て直さなければならぬのは世界の総和であり、道徳であり、美学であり、信仰であり、新しい人間性である。この荒廃した精神的風土の中で、詩の果たすべき役割とは、そして、詩人とは――

詩や随想を中心としたこの詩誌が、創刊の

心を抱き、「詩の果たすべき役割」を自問し  
つつ一号でも長く続けられんことを願う。

『詩的現代』三十二号は相変わらず読みごた  
えがあった。立原道造の特集、富士芳秀の  
「ジジイの覗き眼鏡7」も面白かった。その  
中から山中従子の「夢の駅」を引く。

時刻表を見つめたまま立っている／白いワ  
ンピースの昔のわたし／ホームに取り残さ  
れている／白い夏雲／降りる客も乗る客も  
いない駅／一日に一本／少し傾いた時間だ  
けを乗せた列車が／やって来た／待ってい  
る人は今日も来なかった／わたしが／呼ん  
でいる声が聞こえないのか／彼女は／ひと  
つ／まなざしのように／立ちつづけている  
／わたしは／彼女を／あの駅に置き去りに  
したまま／果てしなく長い吊り橋を渡って  
／はるか／夢の端まで来てしまった

それがどのような駅なのかホームなのか、  
その風景も佇まいも人それぞれだろうが、人  
間は誰しも心の奥で「ホームに取り残されて  
いる」のかもしれない。現実ではない「少し  
傾いた時間」が流れている佳作だ。

『座』六十五号を読む。老いの時間と向き合  
うしみじみとした詩が寄せられている。その

中の一篇、森山貞子の「冬の日」を引く。

人ごみの中／ひとり／葱を買う／大根を買  
う／／思いつくまま／厚いドアを押し  
みる／懐かしい頃のものにほひ／黙って／あつ  
いコーヒーを飲む／黄昏にうるんだ踏切  
／目の前を／疲れた電車が通り過ぎてゆく  
／駅から湧き出る人の群れ／襟を立て／み  
な足早に通りに行く／／風の中／ほんやり  
と冬の日が過ぎてゆく

冬の日の暮れ時、買い物をし、古い「には  
ひ」の中で街や駅の様子を眺める。人生を歩  
み続けてきた人の、生きるひとときに滲みこ  
む孤独のさりげない描写が見事だ。

『時刻表』七号を読む。中塚鞠子「北の街で」  
を引く。

粉雪が舞う／古い駅舎に／一輛だけの赤い  
電車が止まる／降りてこない／／駅舎の横  
の大きな樺の樹の下で／雪を避けて待つ／  
葉を落とした樺はひろびろと枝をひろげて  
はいるが／私を守ってはくれない／／夜  
を歩く馬は／／斜面を とことこと行く  
／／首から小さな袋をさげた馬が行く／袋  
の中から声が聞こえる／私を呼んでいる声  
だ／行かねばならない／／馬の肩に粉雪が

舞う／私はとほとば馬について歩く／雪の  
上に一人と一頭の足跡が続いて／やがて粉  
雪に消され見えなくなり／／赤い車輪を忘  
れ／待っていた人を忘れ／悲しみも喜びも  
忘れ／夜を歩く馬と歩く

寂寥の風景がまざまざと浮かぶ。定家の新  
古今の和歌「駒とめて袖うちらはらふかげもな  
し…」、ぎりぎりの雪と馬の夕景は有名だが、  
この詩も一層切実な命の哀しみの光景だ。

『Point』四九号は、愛媛松山登の「お  
んなからの総合文芸誌」である。このような  
仕事がある地に生きる人々の息吹を伝え、文  
化を創る。森原直子「折る」を引く。

真っ青な／一枚の折り紙／／その男の子は  
／ひらひらさせながら／／駈けてきた／／  
／／つてちようだい／／陽が昇る前の／山の端  
に溶け始めた漆黒からの青／深海の静寂は  
どの青／／四つ折りにする／四角の袋を開  
いて三角形／角を折りあげ／正方形の角を  
再び／折る／指先の記憶／口から口へ／言  
い伝えられた記憶／／ほら ふくらませて

「ひらひら」の一枚が記憶を辿って「真っ青  
な」鶴になる。「折る」という字は「折る」  
に似ると実感する、いい詩だ。